

ドクターとフジ



ニッポン
ドクター和の

臨終区巻

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。か東第兵二ニクリカを診察する。大阪府長尾市で「人を救う」をテーマに「死に方」を研究する。著「痛くない死に方」はベストセラー。関西国際大学客員教授。

が、もし喀出できないと肺炎に至ることがあります。

私は、高齢者の外来診療や在宅医療に従事していますが、まさに誤嚥性肺炎の対応に明け暮れる日々です。50回以上も肺炎の治療を繰り返した患者さんもおられます。そのうち十数回、入院加療を要し、4年前に在宅医療に切り替

えたあと3回入院。いずれも一時的に人工呼吸器が装着されましたが、回復し在宅復帰されました。

何十回も肺炎治療を繰り返すことができるのは国民皆保険制度がある日本だけで、スペインでは難しいかもしれません。肺炎を何十回も繰り返せるぐらい日本の医療は発達しましたが、どこが人生の最終段階なのか、ますます分かっていくなってきました。

欧米では、誤嚥性肺炎は病氣というよりも加齢の結果と認識され、いったんは治してもすぐにまた繰り返すことが特徴なので、最終は「治療しないで緩和ケアで対応」という選択も出てきました。



⑦ 日下武史

ただ、日本では誤嚥性肺炎に伴う医療訴訟を恐れるあまり、まだ十分に口から食べられる人

睡眠中に起こる誤嚥性肺炎

じたうえに胃ろう造設を迫る病院や施設が存在します。生きることは食べること。まだ食べられる人への絶食指示はあまりにもかわいそうです。このあたりの事情は共著『ばあちゃん、介護施設を間違えるともっとボケるでー』（ブックマン社）に詳しく書きました。ぜひ覚えておいてほしい知識として、たとえ胃ろう栄養にしても誤嚥性肺炎のリスクは減らないことです。

誤嚥性肺炎は食塊の誤嚥ではなく夜間睡眠中に口腔内にたまった唾液などが気管内に垂れ込んだ結果、徐々に起こる病態なのです。90代の人が誤嚥性肺炎で亡くなられた場合、死亡診断書の死因欄に書く病名を肺炎か老衰かで迷うことがあります。「肺炎か老衰、どちらで書きましょうか？」とご家族に聞いてから書くことも。日下さんは異国の地で胃ろうも勧められず、過剰な延命治療もさげすみやかな最期を迎えられたことでしょう。

日下さんが再婚されたのは5年前。日下さん81歳、奥様73歳の時だったとか。老々婚をスペインの地で終わらせる…ドラマチックな人生の千秋楽に、心からの拍手を。

日本のミュージカル文化の礎を築いた劇団四季創立メンバーで俳優の日下武史さんが5月15日に静養先のスペインで亡くなりました。86歳でした。死因は誤嚥(ごえん)性肺炎と発表されています。現在、日本人の死因1位はがん、2位は心疾患、3位は肺炎です。肺炎でも高齢者の大部分は、日下さんと同じように誤嚥性肺炎なのです。

年を取って飲み込む力が衰えると、食べ物や唾液が誤って気管に入ってしまうことがあります。咳反射で出すことができず肺炎に至りません